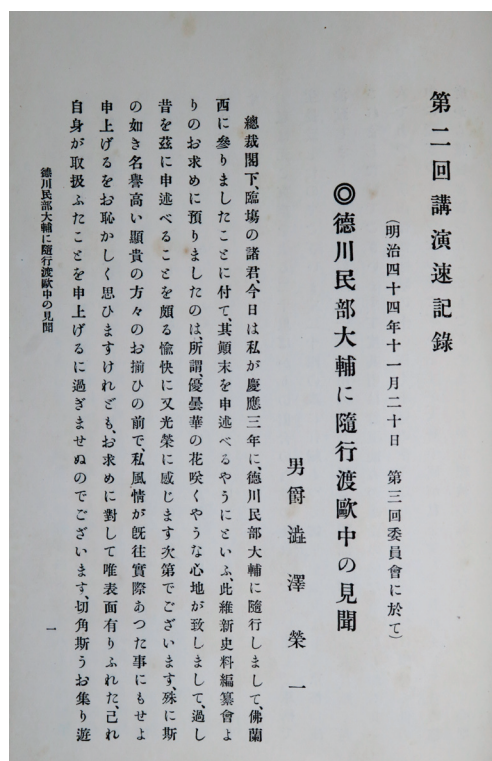
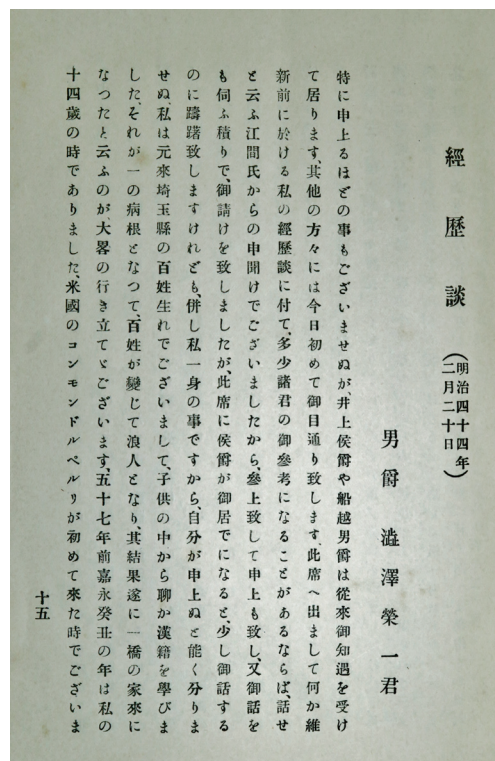


# 渋沢栄一



\* 毛利家文庫76速記類56「温知会講演速記録」（15の1）

## 解説

渋沢栄一（しぶさわ えいいち）は1840（天保11）年、現埼玉県深谷（ふかや）市の豪農に生まれ、尊皇攘夷・倒幕を志しましたが、京都での志士活動に行き詰まり、一橋慶喜に仕えることになりました。慶喜は1866（慶応2）年将軍となり、渋沢は翌年のパリ万国博覧会に将軍の名代として出席する慶喜の異母弟・徳川昭武の随員として渡仏し、同時にヨーロッパ各国を訪問してグローバルな見聞を広めました。

維新後、1873（明治6）年には大久保利通や大隈重信と対立して大蔵省を井上馨と共に退官、以後は実業家として第一国立銀行や東京証券取引所のほかガス・保険・ホテル・鉄道・ビール等多様な企業の設立・経営に関わり、また社会活動家として東京慈恵会・日本赤十字社の設立などに携わりました。実業教育や女子教育にも力を入れ、多くの大学の設立・経営にも関わりました。

写真は、渋沢が幕末期に洋行したときの様子（右）や自らの経歴（左）を語った講演の速記録です。

\* 渋沢栄一と井上馨が、大蔵省を去った直後に出した政府への建言書は新聞に掲載されて一般に流布したことから、事態を憂慮した政府は7月、掲示をもってそれに対抗しました（「前大蔵大輔井上馨同三等出仕渋沢栄一建言書新聞中へ記載二関シ掲示」県史編纂所史料2118）。